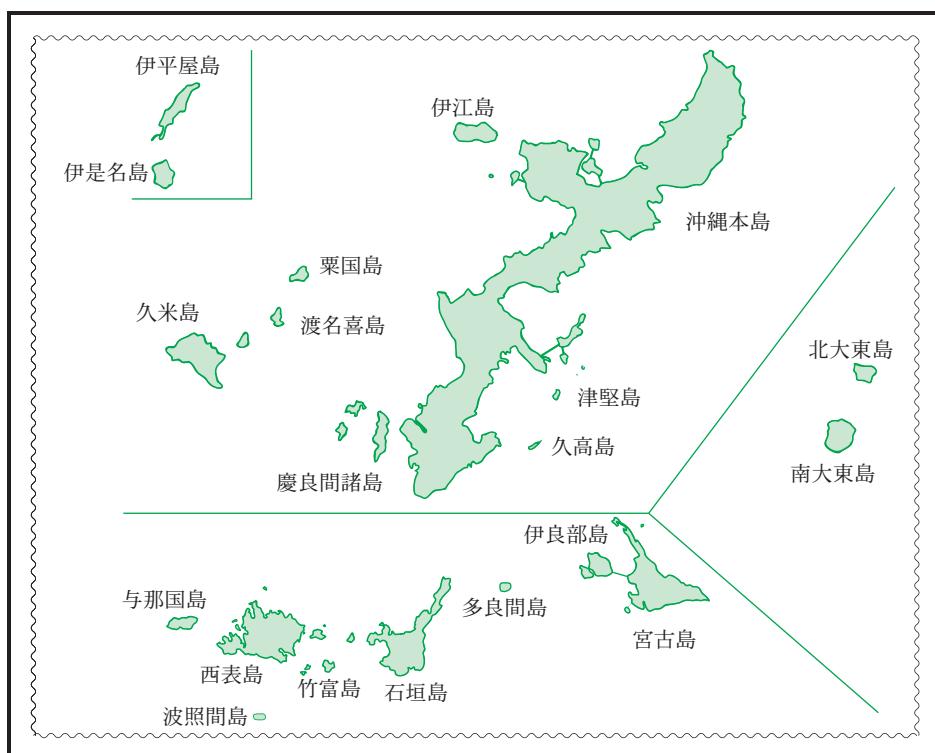




沖縄県小学校長会
沖縄県中学校長会

第 89 号

会 報



もくじ

1. 活動を振り返って
 - (1) 沖縄の教育の新たな地平を切り拓く校長会

沖縄県中学校長会 会長
南城市立玉城中学校 校長 有 銘 真一郎 1
2. 県校長研究大会那覇大会を終えて

沖縄県小・中学校長会研究大会那覇大会を終えて
那覇地区小学校長会 会長
那覇市立城西小学校 校長 古賀 義之 3
3. 特色ある学校づくり
 - (1) 地域の特性を生かした交流と体験の充実

与那国町立与那国小学校 校長 水見 拓磨 5
 - (2) 「島立ち」に向けた未来を見据える「島建ち教育」

伊江村立伊江中学校 校長 伊波 寿光 7
4. 校長講話
 - (1) 「一期一会」の想いを込めて、伝えたい事を全力で伝える
～『想い合う心』を育むために～

沖縄市立越來小学校 校長 渡久地 裕子 9
5. 九小協・全九中研究大会に参加して
 - (1) 志を持った全国の会員と協働的な学びを実感した福岡大会

糸満市立潮平小学校 校長 新垣 誠 13
 - (2) 第七十六回 全九州中学校長研究大会熊本大会に参加して
多良間村立多良間中学校 校長 安田 一博 15
6. 全連小・全日中大会に参加して
 - (1) 第七十七回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会に参加して
那覇市立城東小学校 校長 神谷 貴子 17
 - (2) 『第七六回全日本中学校長研究協議会香川大会に参加して』

糸満市立高嶺中学校 校長 比嘉 正樹 19
7. 全連小海外視察研修報告

二〇二五年度全連小海外教育視察で学んだこと
那覇市立金城小学校 校長 米嵩 瞳子 21
8. 在外日本人校長たより

派遣校長としての挑戦と学び
上海日本人学校浦東校 校長 稲嶺 盛久 23

今年度の活動を振り返って



沖縄の教育の 新たな地平を切り拓く校長会

沖縄県中学校長会 会長 有銘 真一郎

令和七年度も、県内の小・中学校教育の充実発展のために、会員の皆様のご理解とご協力を賜り、沖縄県小・中学校長会の諸活動を滞りなく進めることができました。心より厚く御礼申し上げます。

沖縄県小・中学校長会は、「沖縄県小・中学校教育の振興を期するために学校経営の諸問題について解決を図ること」を目的として活動しています。令和七年度は「魅力ある学校づくりを目指した学校経営の充実」、「生きる力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善」を本会の学校経営指針として、それぞれ十項目の努力目標を立て、学校現場の課題解決と教育力の向上に向けたさまざまな活動を開催してまいりました。

本年度は、二年ぶりとなる小・中合同開催による校長研究大会をはじめ、地区教育懇談会や行政との意見交換、全国・九州校長会との連携など、多面にわたる事業を進めることができました。特に、次期学習指導要領改訂の方向性が示される中、教育課題の変化に対応する視点の共有、人的課題や働き方改革の進行、ICT端末の定着と課題の整理など、学校経営に求められる視点は多様化しています。本会は、そうした状況を踏まえ、校長として求められる判断力・調整力・先導力を高める機会を重ねてきました。

一 はじめに

令和七年度も、県内の小・中学校教育の充実発展のために、会員の皆様のご理解とご協力を賜り、沖縄県小・中学校長会の諸活動を滞りなく進めることができました。心より厚く御礼申し上げます。

ここに一年間の活動を振り返り、報告いたしました。本会の活動が会員の皆様の教育活動及び学校経営の一助となることを期待します。

二 全国・九州校長会を通して

全日本中学校長会理事会並びに全九州中学校長協議会常任幹事会へ沖縄県中学校長会会長として参加し、国の教育政策の動向を把握することもに、各都道府県の課題や取組について意見交換を行いました。特に、教員不足の常態化、働き方改革の推進、部活動の地域移行・地域展開、ICT教育の課題・防災・安全教育、そして次期学習指導要領の改訂に向けた議論等については、多くの自治体で共通する重要な事項であることがわかりました。

このような全国・九州の理事会、幹事会、及び本県校長会員が毎年参加している全国・九州の校長研究協議会での情報や施策の共有が本県校長会の活動をより一層充実させ、本県の教育活動の充実と予測不能な新たな時代における課題への対応に繋がっていくと考えます。また、今後の本県校長会の発展のためにも、会員の皆様を全国・九州の研究協議会へ派遣し、全国の校長先生方と交流しながら意見交換し、学びを深め、その成果を持ち帰り還元していくことが大切であると考えます。会員の皆様のご協力をお願いします。

三 沖縄県小・中学校長研究大会（那覇大会）

本年度の研究大会は、二年ぶりの小・中合同開催となりました。また、琉球新報ホールを主会場として研究大会が行われ、那覇市を主会場としての大会は初めての開催となり、県内各地域より多くの会員が参加しました。大会は教育課題研究の貴重な場となり、多くの成果を得ることができます。那覇地区小学校長会長の古賀義之会長、同シップのもと那覇地区の校長先生方が、開催に至るまで細かな配慮を重ね、素晴らしい環境を整えてくださいました。そのご尽力と心温まるおもてなしに感謝申し上げます。

小学校は「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題とし十分科会を設置しました。中学校は「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を大会主題とし六分科会を設置しました。それぞれの分科会で経営ビジョンや組織・運営、教育課程編成や確かな学力等、様々なテーマが設定され、研究発表と協議が行われました。どの分科会でも参加者間で貴重な実践知が共有され、校長先生方の熱く語る姿や熱心に聞き入る姿、お互いの悩みに共感する姿はとても印象的でした。多くの示唆と学び、そして会員相互をつなぐ分科会となりました。

また、半嶺満県教育長による講話「本県の教育課題と対策」では、本県の七つの重点施策を踏まえて、学力向上に向けての課題や不登校の問題等、本県教育の方向性や課題が整理され、校長として何に取り組むべきか、大きな示唆を得ることができます。さらに、具志堅隆松氏による記念講演「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」では、本県教育の原点である「平和教育」を改めて問い合わせました。さるべく、教育について考えさせられました。

本研究大会を振り返り、校長としての資質・能力を高める充実した研究大会であつたと思います。また、会員相互の連携を深め、今後により充実した教育活動に寄与するものでありました。参加した会員の皆様からも大会の質の高さとスマートな運営に感謝の声がたくさん寄せられました。本研究大会に携わった多くの会員の皆様に心より感謝申し上げます。

四 本年度の活動

(一) 地区教育懇談会

本年度も六地区において地区教育懇談会を開催しました。地区教育懇談会は各地区校長会役員と県校長会役員が、各地区の課題を共有し、学校教育に資することを目的に実施しております。今年度は六月五日の宮古地区を皮切りに、八重山地区、那覇地区、中頭地区、国頭地区、島尻地区の順で、六地区すべてで懇談会を実施し、各地区における教育課題を共有しました。教員の未配置問題、依頼文書や調査の削減、へき地における教員の宿舎の問題、部活動の地域展開、役職定年制についてなど、地区ごとに様々な意見や要望があり、校長先生方がご苦労されている現状と課題解決に向けて努力している様子がよくわかりました。各地区から得られた情報は、県校長会教育行財政部が取りまとめ、県校長会役員会で議論を重ねた後、「校長会と行政との連絡会」において県教育庁に要請し、解決に向けて取り組みました。取りまとめにご尽力いただきました県校長会教育行財政部及び各地区校長会教育行財政部の皆様に感謝申し上げます。

(二) 校長会と行政との連絡会

校長会と行政との連絡会は、教育行政と校長会が緊密な連絡を図り、学校の管理運営等に関して理解を深め、学校教育の一層の充実に期すること

を目的に年三回開催しています。

五月の第一回は義務教育課からの行政説明、九月の第二回は県校長会からの要望事項説明、十一月の第三回は要望事項に対する教育行政からの回答がありました。（回答は、令和八年一月に会員へ配布予定）

本年度の最重要課題として県教育庁に要望したのは、①正規率改善による本務教員及び臨時の任用職員の確実な配置に向けた人材確保について、

②小学校の専科配置と中学校教員の増員による働き方改革の推進について、③学校への依頼文書や

学校対象調査報告の削減及び簡素化の推進について、④児童生徒への教育相談並びに指導・支援を

充実させるための、児童生徒支援加配の配置拡充について、⑤離島へき地・本県島しょ性の諸課題等を十分に考慮した上で生徒への高校進学に係る生活支援の強化及び離島校勤務教員を含む県内全ての教員の住宅確保、研修等、部活動・文化活動等の引率に係る旅費の拡充について、でした。最重要課題事項以外にも学校の様々な課題について改善を要望し意見交換をしました。

意見交換の中で、県教育庁の関係各課においても学校の教育課題の解決に向けてご尽力されていました。また、課題の解決に向けて取り組む中で、人事や予算に係る整備が追い付かずご苦労されていることも感じました。県校長会としても他道府県の情報を提供するなどして、今後も県教育行政と連携して、学校教育の一層の充実に取り組んでいきます。

五 おわりに

本年度の活動は、会員の皆様の積極的な参加とご協力により、充実したものとなりました。校長会は、学校現場を支える組織であり、同時に教育の未来を創る意志を共有する場でもあります。次期学習指導要領の改訂期を迎える今、校長として求められる役割はさらに大きくなります。引き続き、互いに学び合い、支え合いながら、本県の子どもたちの未来のため、教育の歩みを進め、校長一人ひとりが希望を語り、学びをつなぎ、行動するリーダーとして、沖縄の教育の新たな地平を切り拓いてまいりましょう。

結びに、会員の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、令和七年度の活動の報告といたします。

校長会の研究活動は、四つの部会が中心となり実施しています。調査研究部では、「働き方改革の推進」をテーマとして本県が推進している「ピースフルプラン」について県内各小・中学校の取り組み・現状・工夫や課題をまとめ、考察を行つて

います。生徒指導委員会では、「魅力ある学校づくりの推進」をテーマとして、チーム学校として協働する組織体制づくりについて各学校の実践事例を紹介しています。教育改革委員会では、小学校部会が「持続可能な魅力ある学校づくりをめざして」として業務改善に向けた効果的な取り組みについて各学校にアンケートを実施し結果をまとめています。中学校部会は「部活動の適正化」として部活動地域展開による働き方改革の取り組みについて各学校にアンケートを実施しその結果をまとめています。学力向上推進委員会では、各学校の学力向上に係る実践事例をとりまとめて紹介しています。

なお、本年度の校長会の研究活動は「研究紀要第二四集」として発刊し、既に会員の皆様に配布しておりますので、詳しくは、本年度の研究紀要をご確認ください。各部、各委員会が調査研究した成果を会員の皆様で共有し、各学校の経営に活かしていただきたいと思います。

沖縄県小・中学校長会 研究大会那覇大会を終えて



那覇地区小学校長会 会長
那覇市立城西小学校 校長 古賀義之

一 はじめに

令和七年度第六十六回沖縄県小・中学校長会研究大会那覇大会が、十一月六日（木）・七日（金）の両日、那覇市琉球新報ホールを全体会場として開催されました。本大会は、県内の公立小・中学校長が一堂に会し、学校教育の充実と学校経営の改善に向けて協議・研鑽する貴重な機会であります。小学校においては「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、中学校においては「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を主題として掲げ、二日間にわたり熱心な研究が行われました。

二 地区の取組

今回の那覇大会は、令和三年度に予定された大会が新型コロナウイルス感染症の影響により中止されることを受け、平成二十九年度以来、実際に九年ぶりの開催となりました。前回大会に携わった校長がいない状況下での準備は容易ではなく、那覇地区運営委員は県校長会崎原永輝事務局

長の助言を得ながら、一昨年度より約二年をかけて準備に取り組んできました。

特に、これまで主会場として使用してきた「てだこホール」が借用できず、初めて那覇市内の琉球新報ホールを主会場としたことは大きな挑戦でありました。さらに、分科会会場も県立武道館、ほしごら公民館、八汐荘、給食会館、沖縄タイムズビル、南部合同庁舎と多岐にわたつたため、会場確保に向けた調整は容易ではありませんでした。前年度は総務部長の吉村中学校総務部長、今

年度は赤嶺小学校総務部長両校長を中心とした県事務局と緊密に連携し、丁寧に会場交渉を進めていただけしたことにより、ようやく全会場の確保に至ることができました。

三 大会一日目

大会一日目全体会では、半嶺満県教育長による「本県の教育課題と対策」と題する講話が行われました。講話は、甲子園での沖縄尚学高校の優勝や東京世界陸上の話題に触れながら、教育の「不易」と「流行」を踏まえ、本県教育の充実に向けた七つの重点取組事項について、データに基づき明快に示されました。働き方改革や教育DX、学力向上、不登校支援、国際理解教育、特別支援教育など、学校現場が直面する課題に対する方向性

先生方のご理解と協力により、大きな混乱なく運営することができました。大変ありがとうございました。

一方で、全体会場を始め、いくつかの会場では前日準備ができず、全体会場は当日の八時から、また一部の分科会では昼食時間を利用しての準備となりました。

時間的制約の大きい中での当日準備であります。が、役員・部長・部員の連携により円滑に整えることができ、那覇地区の組織力を実感する場面ともなりました。



は、参加した校長にとって今後の学校経営を考えるうえで大きな示唆を与えるものとなりました。

午後の分科会は、小学校十文科会、中学校六文科会に分かれて実施されました。各校の実践報告を踏まえた研究協議では、学校現場の課題や成果が率直に共有され、参加者同士が互いの学びを深め合う時間となりました。

分科会終了後の教育懇談会では、予想を上回る参加があり、八汐荘屋良ホールが熱気に包まれました。伊波寛仁県教育庁参事の祝辞、宮里寿子那覇市教育長の歓迎あいさつ、新地康秀那覇教育務所長の乾杯の音頭はいずれも教育への熱意に満ち、参加者の士気を大いに高めるものになりました。各地区校長同士の交流も深まり、短い時間ながら実り多い懇談会となりました。

四 大会一日目

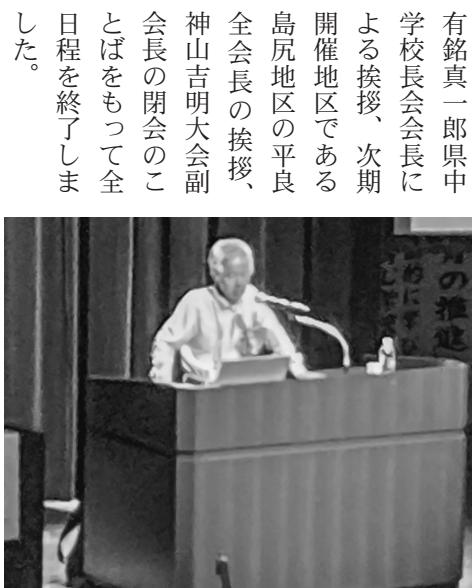
二日目の全体協議では、美差淳司県小学校研究部長による各分科会の研究協議総括が行われ前日の熱心な協議内容をわかりやすくまとめていただ



きました。その後、松尾剛県小学校総務部長による大会宣言文報告が行われました。

その後の記念講演では、沖縄戦の遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表の具志堅隆松氏を講師に迎え、「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」と題してご講演いただきました。真嘉比地区での遺骨収集の実際や、遺骨とともに発掘された手榴弾・砲弾などの遺物を通して見えてくる沖縄戦の現実について、スライドを用いて丁寧に語られました。講演の最後に述べられた「人を殺してはならない」「自分が殺されることを認めてはならない」「自分で自分を殺してはならない」という力強いメッセージは、平和教育の重要性を改めて胸に刻むものとなり、学校におけるいじめの根絶にも通じる深い示唆を含んでおり、本大会の意義をさらに深める充実した内容で、戦後八十年の節目にふさわしい平和教育の在り方を再考する契機となりました。

閉会式では、



有銘真一郎県中学校長会会長による挨拶、次期開催地区である島尻地区の平良全会長の挨拶、神山吉明大会副会長の閉会のことばをもつて全日程を終了しました。

五 終わりに

今回の那覇大会が成功裏に終えることができたのは、ひとえに参加したすべての校長先生方の温かいご理解とご協力のおかげであります。心より感謝申し上げます。初めての那覇市中心部での開催に伴う制約の多い状況のなか、主体的に大会に参加していただいたことで、全体が秩序正しく進行し、充実した内容となりました。

また、一昨年度から約二年にわたり準備に尽力した那覇地区運営委員、そして大会運営の中心として支えてくださった赤嶺栄達小学校総務部長、瀬名波淳小学校総務副部長、太田寛中学校総務部長をはじめ、各部部長・部員の皆様の献身的な働きに深く敬意と感謝を申し上げます。さらに、県校長会役員各位、崎原永輝事務局長、比嘉紘美事務局員には、事前準備から当日の運営まで多大なるご支援を賜りましたことに感謝申し上げます。

本大会を通して、那覇地区の結束力と沖縄県校長会全体の教育に対する情熱を改めて実感することができました。この学びと協働の経験を、今後の学校経営の改善と、子どもたちの笑顔あふれる「魅力ある学校づくり」へとつなげていきたいと感じております。

沖縄県校長会のさらなる発展と、県内児童生徒の健やかな成長を心より祈念し、結びといたします。会員の皆様におかれでは、今大会へのご理解とご協力に深く感謝申し上げます。大変ありがとうございました。



地域の特性を生かした 交流と体験の充実

与那国町立与那国小学校 校長 水見拓磨

一 はじめに

与那国島は石垣市より西へ一一七kmにあり、台湾との距離一一一kmに位置している日本最西端に浮かぶ絶海の孤島である。石垣市より台湾が近く、条件の良い日には台湾の島影を見ることができる。東西に細長い形で周囲二七・五km。十一月には一周マラソン大会が開催されている。サトウキビや畜産などの農業や水産業に従事する人が多く、島の西にある久部良漁港はカジキ漁が盛んで、毎年七月には国際カジキ釣り大会が開かれており、冬場はハンマーへッドシャークが見られるダイビングスポットとしても有名である。島内には五つの公民館があり、各



与那国から見える台湾の島影

公民館を中心とした伝統が継承されている。季節の折り目の祭事に行われる歌や踊りは「与那国島の祭事の芸能」として国指定の重要無形民俗文化財に指定されており、豊年祭には島外からもたくさん的人が訪れる。

与那国町は一島一町で人口は一六三五人（二〇二五年十月一日現在）。祖納・久部良・比川の三つの集落からなっており、それぞれに一つの小学校がある。中学校は二校あるが高校はなく、「十五の島発ち」をひかえる子ども達が、島の伝統文化や豊かな自然に誇りを持ち、自立（自律）して生活していく力を持つよう、それぞれの学校が特色ある学校づくりに取り組んでいる。

二 本校の教育目標

与那国小学校は祖納を校区とする学校で、その歴史は古く、今年、創立一四〇周年を迎えた。昭和二十年代には七〇〇名以上の児童が在籍していたが、今年度は四七名。年を追うごとに減少する傾向にある。私は四十四代目の校長になる。教育目標を「未来を切り拓き 支え合い 高め合う児

三 教育委員会と連携した台湾交流

八重山諸島と台湾は戦後に国境が引かれるまで、直接の行き来が頻繁に行われていた歴史があつた。与那国町は一九八一年に台湾の花蓮市と姉妹都市締結協約を結び、今年の十月に締結四十三周年を迎えた。先人たちが築き上げてきた交流の歴史の中で、二〇一二年より与那国町内の小学校六年生と花蓮市のタバロン小学校の交流学習がスタートしている。コロナ禍により直接交流ができない時期もあつたが、現在は三小学校の校長が輪番で校長を務め、ホームステイをしながら、体験活動を通して親交を深めている。

本事業の主催は教育委員会で、あるが、与那国町の小学校とタバロン小学校、それぞれの担当子ども達の活動を計画している。軸となるのは郷土芸能を通しての交流である。お互いの芸能を披露し、教え合い、最終日



伝統芸能「棒」の披露

の成果発表会では、衣装交換をしてタバロン小学校全児童・園児の前でお互いの芸能を発表している。今年の交流ではお互いの地域の豊年祭から、与那国からは「棒」と「踊り」タバロン小学校からは原住民族「アミ族の歌と踊り」が披露された。



交流のふりかえり

今年度はICTを活用した事前交流が計画されていた九月末に、タバロン小学校がある光復郷が台風の水害を受け、児童会からの呼びかけで義援金を携えての交流となつた。十月、水害の影響が残る中での派遣となり、ホームステイはできなかつたものの、バスで通いながら二日間の交流をすることができた。かつては頻繁な往来があつた両地域の子ども達が交流し、言語の壁を越えて親交を深める活動は、今後予想される先行きが不透明な時代を生き抜く力、本校の教育目標である「未来を切り拓き 支え合い 高め合う児童」の育成に繋がっていくと確信している。

四 地域人材・教材を活用した稻作体験

かつて、与那国島は「年にお米が二度とれる」と唄われた稻作の盛んな島であった。公民館行事には、「豊年祭」に代表される稻作に関わるもの



稻刈り体験

昨年度は稻作農家の方をお招きしてキャリア講演会としてお話を聞いていただき、島の稻作農家の三大行事「豊年祭」「種取祭」「物忌祭」を中心に稻作に関する行事について説明していただきた。豊年祭は夏休みに行われることもあり、子ども達は学校ではなく地域の一員として参加している。今後は、稻作体験を継続していくとともに、公民館長や関係機関と連携しながら、お米に関する行事を体験する機会をつくり、自分の島の祭りや公民館行事の意味を理解できるよう教科横断的な教育課程編成を工夫していく。子ども達一人ひとりが地域文化の継承を自分事として捉え、将来の島のあり方についてともに考えていくようにしていきたいと考えている。



田んぼでの泥遊び

五 おわりに

地域特有の自然や伝統文化やそれを継承していく人々の営みなど魅力がある地域だが、成人後、島に戻る教え子たちは少ない。「十五の島発ち」に向け、予測が困難な未来を自分たちの力で切り拓いて生きていく力を育むとともに、この島で育つたことに誇りをもち、将来島に帰るかどうかにかかわらず、島の未来を自分事として捉えていきたい。



「島立ち」に向けた 未来を見据える「島建ち教育」

伊江村立伊江中学校 校長 伊 波 寿 光

一 はじめに

本校は一九四八年四月の学制改革により、新生中等学校として設置され開校した。一九五二年琉球政府が創立され、校名を伊江中学校と改称され現在に至っている。場所は伊江島のシンボルである城山（ぐすぐやま）の麓に位置し、学校からの眺望もすばらしく、その風景は学校がある場所としては沖縄一と称賛されている。

しかし、伊江村は離島であるが故に高校進学と同時に親元を離れ自立した生活を余儀なくされる現実にある。

育て、各教科の基礎学力を踏まえた確かな学力を身に付けて、将来に向けた目的意識を高める教育活動「島建これ」をふまえ中学卒業までに、自立心や思いやりの心を

育て、各教科の基礎学力を踏まえた確かな学力を身に付けて、将来に向けた目的意識を高める教育活動「島建これ」を目指している。

三 具体的な運営方針

(1) 教育課程の実施、反省、改善のP D C Aサイクルを行なう。

(2) 三K会（校長・教頭・教務）→運営委員会→学年主任→学年職員の連携を重視してチームとしての学校運営を行う。

(3) 教育環境の整備に努め教育活動の成果を最大限發揮できるよう努力する。

(4) 生徒会の自治力の育成を目指す。

(5) 伊江村の教育理念を基に伊江中学校を核とした教育実践を行う。

六 学力向上に関する校長の具体的な取り組み

(1) 授業における伊江島スタイルをそろえる」という点である。具体的に説明すると「廊下にゴミが落ちていたら先生方が率先して拾う」「枯れかけの植物が校内にあれば先生方も水をかけてあげる」「掲示板の掲示物が壊んでいたらその場で直す」などとの確認である。仮に支持的風土作りの意図が教師側にあり、後で生徒に指示して対応する計画があるなら良いがそうでなければ「気付いた職員がその場で対応していく」という確認を年度当初の職員会議で行っている。「仕

四 生徒会との連携

(生徒会専門委員会の職員会議への提案)

毎月の全体集会で生徒会月別目標の提案と前月の反省評価を各種専門委員会の生徒にさせてている。今年度から

新しい取組として全校生徒に提案する前に職員会議で生方に提案し質問を受け、考えて返答する機会を設定している。生徒はICT機器を利用して職員会議説明用の画像が進んできたと感じている。これが自主的な活動の活性化を進め学校の支持的風土作りの一歩になりつつある。

五 校内研修

(1) 校内研修を通して

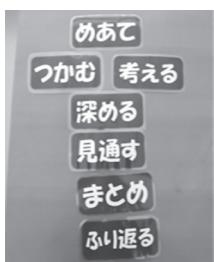
全校体制で校内研修テーマに迫るため、授業改善を推進していく事を年度当初のテーマに掲げた。全体の校内研修のみではなく教科ごとに授業改善に力を入れて教師の個々の授業力を高めるために他校の先生方を本校に招請して教科ごとに具体的に研究をすることができている。

(2) 互いに学び会う雰囲気を生徒同士を持たせるため、「人権講話」を設定し互いが話し合う環境作りに努めた。本校は小規模校のため「人間関係作り」に課題がある。この課題については今後も学力向上と並行して

改善を努める必要がある。

(3) 互見授業に向けて日々、授業改善を心がけ、教科の壁を越えて教師同士がチームとなり「授業作り」について外部講師からの助言や意見交換を行っている。

(4) 地域・保護者への学校の取り組みの状況等の周知のためリーフレット「よくわかる伊江中学校」を作成して保護者・行政・公民館などに配布し学校の教育方針を周知した。



ド「つかむ」「考る」「深める」「見通す」「まとめる」「振り返る」に即した基本理念を令和五年度より継続している。

一、二学期で各教科の公開授業を行いスタンダード授業の改善を全体で共有している。そこで、全教室の黒板にスタンダードの掲示物を貼り付けて授業で利用できるように準備してある。



七 キャリア教育の推進

キャリア教育を意識した授業を取り入れて学び続けることで興味や関心を持たせる工夫を行う。学ぶことが将来につながるよう意識させて将来の展望と見通しを持つて主体的に粘り強く取り組める授業の工夫を行つている。令和六年度から継続して「夢エデュースマップ」の作成、「地域人材を活用した模擬面接（中学三年は十月、中学二年は二月に実施している。）」を令和七年度も実施する。キャリア教育を通して学習する意義の大切さ、自學自習と自主的に学び続ける態度を育てる。

キャリア教育の授業改善を進めて「自立した学習者」を育成する。

(1) 地域人材を活用した模擬面接

伊江村の地域の方々に協力してもらい面接指導をして頂く。PTA役員、区長さん、村内企業、役場関係者を面接官として招聘する。

(2) 「〇学期スタート」の発想

令和六年度卒業式後の春休み前の期間を令和七年度一学期に向けたスタートとして「〇学期」と名付けてキャリア教育の取組みを開始した。その一環として進路指導の早期対策を行つた。学校関係者を面接官として招聘し中学校二年生対象の模擬面接練習を三月に実施して卒業式後も緊張感を持たせた。

(3) 夢を育む「夢エデュースマップ」の作成

① 叶えたいことを考える（思考）
② 叶つたことを考えるとワクワクする。嬉しい気持ち、

熱い気持ちになる。（感情）

③ 思考と感情が合わると「創造力」が生まれ、そこに行動を積み重ねることで夢が叶いやすくなる！と言われている。思考と感情が合わると創造力が生まれる。

この三つを兼ね備えた道具が「夢エデュースマップ」。夢を「可視化」し、成功しているイメージ（思考）とワクワク感を持ちながら（感情）夢に近づく行動を積み重ねていくことが夢を叶えるコツ（創造）を育成する。中学生二、三年生で夢マップの講演会と夢マップ作成をした。夢マップ完成後は二、三年生合同で発表会を開催して（保護者の授業参観も並行して）お互いの夢を共有した。

八 少人数学級の編成・学校裁量の取組を現

中学生三年生で実践

（令和六年度・現三年生が二年生時）

中学校二年生で一学級から二学級の少人数学級編成を行つた。一学級を二学級にするため教師個々の授業時数が増えることと校務分掌の厳しさもあつたが、職員会議で校長から提案、先生方の理解のもと令和六年度は二学年を二学級編成（一組一七名・二組一六名編成）で編成。きめ細かな指導を実践した。

九 伊江村・「保幼小中の連携」と授業公開

伊江村の特色である「保育園・幼稚園・小学校・中学校

合同研修会」において伊江中学校が公開授業を開催した。

令和六年度は全学級道徳。令和七年度は、伊江中学校全学級（各教科）で「伊江島スタンダード」を意識した授業を公開した。授業終了後は分科会と全体会を開催した。保幼小中連携公開授業の日程

(1) 令和七年六月四日（水）数学、英語、理科、社会、特別支援（知的）の授業を開催（伊江中学校会場）

(2) 令和七年七月一日（水）全学級道徳の授業公開（西小学校会場）

(3) 令和七年九月三日（水）全学級算数の授業公開（伊江小学校会場）

伊江島にある小学校二校と中学校一校で連携をとり

授業改善に力を入れている。

(4) 令和七年十一月二六日（水）全学級・進路指導に特化した公開授業の実施

十 県立名護高校附属桜中学校との交流授業（数学科）

県立の中高一貫校と交流学習を通して「深化的課題を

通し学び合う力を育てる」を実践し数学科においては、①数学の授業を通して教師間の指導力の向上を目指す②深化的課題を通して数学の学力向上を目指す。③対話を重視しコミュニケーション能力の向上を目指すことをねらうとした生徒交流授業を実施した。

令和七年九月十二日（金）県立桜中学校二年生と伊江中学校二年生四名が参加し数学の交流授業を行つた。

授業は伊江中学校的数学教師が行い、一時間目は「数について掛け算九九つて指で計算できるの？」のタイトルで授業を行つた。二時間目は「連立方程式を工夫してやつてみよう」のタイトルで授業を行つた。受講した生徒は「掛け算が指を使ってできると分かり自分の中の数学が楽しくなった。」指が十本だから十進数は人間にとつて扱いやすく、実生活において工夫されて使われている」と話し、数学を身近に感じたようだ。今後も交流授業を通して他校とのつながりを深めたい。

十一 教科会の活性化

令和六年度に引き続き各教科の教科会では、校内だけに留まらず他校の職員を招聘し授業を参観、授業研究を教科ごとに実施している。授業の改善および他校の職員との同僚性を高めるために実施している。令和七年度も引き続き教科会の活性化に努めている。

十二 おわりに

伊江中学校に赴任して三年目となるが常に「島建ち教育」を意識して学校運営の改善に力を注いできた。二年間の試行が今年度の教育計画に反映されている。検証し学校運営を進めたことで島を離れた子どもたちが将来いろいろな場所で活躍することを期待している。



「一期一会」の想いを込めて、 伝えたい事を全力で伝える ～『想い合う心』を育むために～

沖縄市立越來小学校 校長 渡久地 裕子

一はじめに

本校は明治十五年に設立され、令和七年に学校創立一四四年を迎える、児童数二四五名（十一月一日現在）の中規模校である。

校区一帯はかつて「越來グスク」の城下町として栄え、その越來城（グスク）から後に琉球国王となつた第一尚氏王統の第六代国王尚泰久王や尚宣威王（第二尚氏尚円王の御弟）を輩出した、歴史と伝統ある地域である。

令和二年に改築された校舎は、明るい玄関ホールや木の香り漂う教室、子どもたちが思いつきり遊べる広場やワクワクする遊具など、建設に携わった方々の大きな愛を感じる魅力的な造りとなつている。

校長として、その魅力ある環境で、「人」と「人が繋がり、幸せを感じる学校教育を志し、「一期一会」の想いを込めて学校経営に挑んでいる。

その一つ目は、眞の「魅力ある学校」を創ることである。そのためには、PTCAの相互連携が欠かせない。本校では、六十名のボランティアの方々が、登下校の安全見守りや、学習の支援、読み聞かせ、校外活動の補助など、教育活動の様々な場面で協力いただいている。その協力体制により、教育目標である、「自ら学ぶ子、心豊かな子、た

くましい子」を、共に育んでいる。

二つ目は、「教職員や地域の『強み』を生かした学校経営」である。学校・家庭・地域ができる事を担い、理解し合う事で、地域の子どもたちを切れ目なく支え、見守る文化が形成される。それに、少子高齢化が進む本地区に於いても、「地域と共に成長する学校」を維持する事が期待できる。

三つ目は、「特別免許状取得制度」を活用した人材発掘である。その「新たなしくみ」は、多くの小学校教師が負担に感じている外国語の授業を、「特別免許状」を取得した講師（ALT）が担当するというしくみである。校長職を拝命した六年前に、初めてこの制度を活用し、その翌年から外国语活動および外国语科を講師が担当する専科的な授業を開始した。それがきっかけとなり、三学年以上の教師が主体的に「教科担任制」や「單元担当制」に挑戦する機運が高まつた。現任校における三年間の実践を通して、「学校へ行く事が楽しい」（学校評価・児童）の回答結果が、令和五年度九二%、六年度九四%、七年度七月時点で八九%である事が取組の効果を証している。

社会的に人材不足が課題となつてゐる現在、校長として挑んだ、人材活用の新たなしくみが今後、学校における教育活動の負担軽減に繋がり、「教

職員のメンタルヘルスの保持・増進」の一助となる事を期待している。

奇しくも、次期学習指導要領では、「余白の創出を通じた教育の質の向上」がテーマとなつてゐる。本校では、「外国语の専科的運用」や「教科担任制」により、子どもの主体性を引き出すために必要な、教師と児童の関係性や学級的支持的風土が向上し、「待つ」ことができる教師が増えた。そのため、教師が得意な分野で高みを目指す意欲が育まれた。

本校では、令和五年度、合唱指導が得意な学級担任が、全員が発表者となる共創活動を通して学級の支持的風土を醸成し、本校初の「学級合唱沖縄県一位」を達成した。その後、担任の荒谷恵友美教諭は、その実践をまとめた研究論文で、沖縄県のみならず全国に於いても最優秀賞を受賞した。この朗報は、学校内外の関係者に、「教育の可能性」や、「教職の魅力」を広く発信してくれた。

その他、教育活動に「余白」を創出する事で、本校では、教職員が各種研修会に積極的に参加したり特別支援教育免許を取得したりと、自己のスキルを、意欲的に高めている。中でも特別支援学級の全担任が、食品衛生責任者の資格を取得し、学期末に開催する販売演習会、「レインボーマルシェ」を充実させ訪れる保護者や地域の方々と共に、子どもたちの成長を喜ぶ姿は、多くの人々に学校の意義を認識させてくれる。



二 校長講話について

子どもたちを取り巻く環境は、社会の急激な変化に伴い、予測困難な時代となりつつある。このような状況の中で未来を担う子どもたちには、「自ら課題を見つけ、情報を収集・分析し、他者と協

働して解決に向かう力」が求められている。

本校では、校長として、このような時代であるからこそ、物事を判断する基準となる、「軸」を持つ事の大切さを、講話や週案コメント、校長だより等を通して伝えている。（校長の学校経営の軸は、勿論、「子ども」である。）

本校では、月に一回、十程度の「講話」を一年生から六年生を前に、実施している。発達段階の異なる子どもたちに、講話の内容が伝わるよう、時間をかけて準備し、体育館のスクリーンいっぱいに写真や映像を映し出し、見出しをつけて伝える工夫をしている。

また、子どもたちの「聴く力」や集中力を高めるために、時々質問をしたり、隣同士で話し合わせたりする機会を取り入れている。子どもたちは、日頃の授業と同様に、お互いの意見を交換し合っている時が、最も生き生きする。

講話の内容については、行事に関連する事や学校内外の出来事、社会的な話題、子どもたちの関心が高い話題など、常にアンテナを張り巡らせ、多様な話題を取り上げている。そして、「学ぶ事で、より良い社会をつくる」という教育の方向性や、他人と比べるのではなく、「自分を超える」をキーワードに、子どもたちの、「やる気」を促す伝え方を心がけている。

また、本校では、学習や各行事に一生懸命に取り組む子どもを育むため、校長だけでなく、全ての教職員で、「学力検査や各行事は、日頃お世話になつておられる方々への感謝を表す機会」と伝え、子どもたちの学びに向かう姿勢を育んでいる。

人は、（特に子どもは）支えられている事を、「あたりまえ」と「勘違い」する傾向がある。そのため、「たくさんの人たちが、大事な時間と労力を使つて、みんなの安全や教育活動を支えている」という事を、校長をはじめ、周りの大人が意識し

て子どもたちに伝えなければ、子どもの心は育たない。改めて、学校・家庭・地域で子どもを見守り、関わり、育てる事が、子の「豊かな心」を育むと、子どもを通して気づかされる。「あたりまえ」とは、「ありがたい（有り難い）」事なのである。

三 具体的実践例

① 六月二三日『慰靈の日』の講話

『慰靈の日』の講話では、実母（九十歳）の戦争体験について伝えている。

「当時十歳だった母は、三歳だった弟をおんぶして親族十名で本島南部の激戦地を逃げ回っていた。毎日爆撃の音に怯え、空腹に耐え、地獄のような苦しみの中、次々と親や兄弟が死んで逝く。おんぶしていた弟が砲弾の破片で即死した時は、悲しみの中、後で遺骨を拾えるように、遺体を父親の着物で包んで埋葬した。」

母はその後、戦地から引き揚げてきた父親と収容所で再会し、戦後の混乱を生き抜いて、私へと「命のバトン」が繋がれた。私を含めて、私たちがここに存在するのは、沖縄戦を生き抜いた人たちが「命のバトン」を繋いでくれたから。だから、「自分も周りの人も、大事にしましょ」と伝えている。

十歳といえば、今年の小学五年生である。

「平和って何だろう」の問いかけに、「こうして学校に通える事や好きなスポーツができる事、友だちと笑い合える事、家族みんなで過ごせる事」と答える子どもたち。本校の子どもたちは、自分と重ねて、「平和ってどんな事」について真剣に考えててくれた。

② 二学期始業式の講話

短い秋休み明けの始業式では、「一学期の評価から、得意な教科はさらに上を目指し、努力が必要な教科は、一学期の自分を超えるために

行動しよう。」と呼びかけた。

また、丁度その時期に、ノーベル賞受賞者の発表があり、ノーベル生理医学賞を受賞した坂口志文教授（「人の役に立つ研究をしたい。」）と、化学賞を受賞した北川進教授（「つらいこともいっぱいあるが、チャレンジ精神が科学者の醍醐味」）を、コメントと共に紹介した。二人の成功は、「宝くじ」に当たるような奇跡ではなく、時には周りから冷ややかに扱われながらも地道に研究を重ねた結果、手にしたものである事を強調し、周りに流されず、強い信念を持って物事に取り組む事の大切さを伝えた。

校長講話で紹介した内容は、子どもたちや教職員、来校者がいつでも振り返れるように、校長室前に掲示している。

四 終わりに

本校では、校長講話の後に教室で担任の先生が子どもたちに講話の内容を咀嚼して伝えたり、子どもたちの様々な意見を拾い上げたりして、校長のことばを繋ぎ、共に子どもたちの「豊かな心」を育ててくれている。

今後とも、校長として、六十名余のボランティアの方々と共に、教育を通じて子どもたちに「希望のタネ」を撒き、「人」と「人」の関わりや、





「至逞」の姿を育てる 浦西中学校のキャリア教育

浦添市立浦西中学校 校長 仲嶺香代

校教育目標を「自今年度より学
校生活の様子がよくわかると保
われている。令和五年には浦
西中学校運営協議会が設立され、
地域・企業との連携が活発に行
われている。

一 はじめに
本校は、平成四年に創立された比較的新しい学
校である。生徒数四八六名の中規模校であり、通
学区域は当山小学校のみの一小一中である。その
ため学年を越えた人間関係が構築され、とても仲
が良い反面、他の学校文化と混ざることがなく、
価値観や概念が固定化され、内部環境の変化に乏
しい。浦添城址等の自然や歴史的遺産に恵まれ、
学校と地域の関係が強く、青年会等の活動も盛ん
である。令和元年にはモノレールでどこ浦西駅が
開通し、ファイ
ルドワーク等の
校外活動で、生
徒が利用しやす
い環境となつた。
令和五年には浦
西中学校運営協
議会が設立され、
地域・企業との
連携が活発に行
われている。

自立心
協働心
向上心

- ・見つけ考え行動し主体的に課題を解
決する生徒【生徒エージェンシー】
- ・思いやりの心を持ち多様な他者と協力
する生徒【ウェルビーイング】
- ・探究を通した新たな価値の創造に
粘り強く挑戦する生徒【イノベーション】

浦西中学校の目指す生徒像

二 校長講話
教育活動の様
子を保護者や地
域に発信すること
を目的に、学
校ホームページを毎日更新して
いる。生徒の肖像
権の許可はとつて
おり、学

らの学びでよりよい社会と未来を興す逞しい生徒の育成」と掲げ、グランデデザインには「自立心」「協働心」「向上心」を、目指す生徒像として示した。本校の特色である総合的な学習の時間「至逞タイム」における探究的な学習を中心に、「個に応じた資質・能力の育成」と、生徒会団活動を中心とした「支持的風土の醸成」を学校経営の二つの柱とし、教育活動全体を通じたキャリア教育の推進に、地域・学校が一体となつて取り組んでいる。



全校朝会での校長講話



体育委員会の提案ボード

三 生徒会活動でウェルビーイング
新生徒会役員が決定し、次年度の活動スローガンを決めるために生徒会主導で校長ミーティングが開かれた。生徒会活動にも校長ビジョンを反映させたいとのことである。そこで決まったスローガンが「学校や地域に参加することを喜びにできる最幸な浦西人へ Let's ウェルビーイング！」である。今年度の特色ある活動として、夏休みのリーダー研修で当山小児童会・各委員会、浦西中生徒会・各専門委員会、地域の皆さんのが同じブルで「ハッピーコミュニティ大作戦」と題し

熟議を行った。小・中学生が主体的によりよい地域にするために何ができるか具体的な活動案を提案し、小中連携と地域への参画意識を高めることにつながっている。



KZNプロジェクトでの団円陣



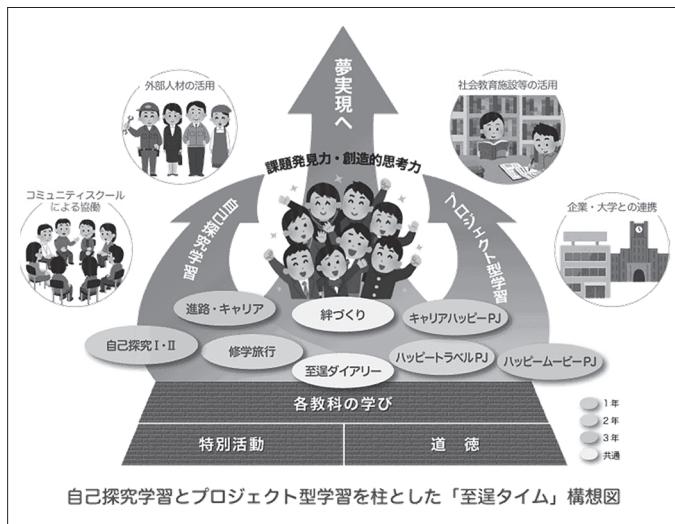
児童会・生徒会と地域による熟議



浦西High祭フィナーレの様子

四 生徒会団活動での絆づくり

浦西中学校の特色の一つである団活動は団長・副団長がリードする異学年集団での絆づくりである。そのため、年度始めに団長・副団長を募集し、



自己探究学習とプロジェクト型学習を柱とした「至遙タイム」構想図

五 学びを社会と将来につなげる探究活動

三年間を通じて教科等横断的な視点、社会とつなげる視点で総合の「至遙タイム」を自己探究とプロジェクト型探究で編成した。生徒は日常的に「みかこ」＝「見つけ・考え・行動する」ことを意識し、探究のプロセスを主体的に進められるよう地域・企業と連携した専門的な視野からの批評

今年度は百名を超える申し込みがあった。生徒会総務によるオーディションを行い、決定すると団長を中心に「KZNプロジェクト」の団円陣や「浦西High祭」の団シングパフォーマンスの考案・練習、各種専門委員会の活動とリンクさせた年間を通しての生徒主体の生徒会団活動が推進されている。

六 おわりに

三年生の最後のプレゼンは「自己探究Ⅱ」として、自身の成長と未来に向けて、三年間の探究で身に付けた力や将来への展望を個人で発表する「私の探究×未来」である。ここではキャリアパスポートや生成AIを活用してプレゼン資料を作成し、「一人一人が浦西中の教育活動を通して、「自分はこう成長した」「身に付けた力はこれです」「未来に向かってこう生きていきました」と、自信を持つて発表する姿を見ることができた。



全体成果報告会での3年生代表

活動や成果報告会を実施している。また、各学年総合的な学習の時間に校外フィールドワークを実施し、生徒自身がアボ取りをした企業や国際通りでのインタビューにモノレールを利用して出かけている。探究活動を推進するために年度当初、大修、夏休みの校内研では企業や地域の方々を招き共に各学年のプロジェクト型探究のプログラムやガイドナンスの見直しのワークショップを実施し、週時程に位置付けた総合部会とあわせて、生徒と教師の学びが相似形となる実践的な校内研究が充実している。

第七七回 全国連合小学校長会研究協議会福岡大会

第七七回 九州地区小学校長協議会研究大会福岡大会



志を持った全国の会員と 協働的な学びを実感した福岡大会

糸満市立潮平小学校 校長 新垣 誠

はじめに

大会主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題「志をもち 多様な他者と協働しながら次代を創る人財を育む学校経営の推進」のもと第77回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会、第77回全国連合小学校長会研究協議会研究大会福岡大会が、十月十六日（木）～十七日（金）にかけて福岡市福岡サンパレス・福岡国際会議場において開催された。

本大会には、全国から約二千三百名の会員が参加し、大会前日の全連小常任理事会、九小幹事会等を皮切りに、一日目は文部科学省講話、全大会、分科会、二日目は講演の日程で充実した大会となつた。

一 文部科学省講話

研究大会全体会に先立ち、行政説明として文部科学省初等中等教育局主任視学官田村学氏より「当面する初等中等教育上の諸課題」についての講話があつた。田村氏は、現在進行中の学習指導要領改定の三大柱「構造化」「柔軟な教育課程編成」「探究の質的向上」を軸に、全国の学校現場



二 大会主題説明

福岡で七十年ぶりに開催された第七七回全国連合小学校長会研究協議会の全体会において、大会日程・運営体制・主題が説明され、前期の活動報告が行われた。大会主題は「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題は「志をもち 多様な他者と協働しながら次代を創る人財を育む学校経営の推進」。AI時代や災害・社会変化に対応する教育の在り方が強調され、教員の働き方改善や非認知能力の育成が重要課題として提起された。大会宣言文は審議委員会で審議後、翌日の全体会で報告されることを確認した。

三 分科会

分科会は十三に分かれ、活発な研究協議が行われた。私が参加した第七分科会では、「学び続ける教職員

が直面する課題と機会を提示した。特に「深い学び」の実現には、知識のネットワーク化と「活用・発揮」によるアウトプットが鍵であり、GIGAスクール構想との連携が不可欠であると強調。また、学習評価における「主体的に学習に取り組む態度」の評価基準における誤解を解消し、各学校が独自性を發揮しつつ共通の資質・能力を育成する方向性を示した。

○第七分科会「研究・研修」

研究 主題 研究の教育力を向上させる研究・研修の推進

協議 題① 学び続ける教職員を育成する研究・研修の推進
研究 主題 学校の教育力を向上させる研究・研修の推進
研究テー マ 「人の百歩」より「みんなの一歩」を目標した校内研修の充実

提案者 兵庫県 太子町立籠田小学校 圓田元彦

小規模校における主体的な校内研修の実践として全教職員が「みんなの一歩」を合言葉に、国語科を中心して授業改善に取り組んだ事例が紹介された。

年度当初の面談で「受けたい研修」「受けてほしい研修」を教員と共有し、年間の方向性を設定し、その結果として教員自身の「達成感」と「やりがい」が研修継続の原動力となつた。また、各地の事例から、研修の頻度や規模よりも「教員自身が『やりたい』と思えるかどうか」が成果に直結することが示された。外部講師や行政支援は補完的であり、校内での「共に学ぶ」文化が持続可能性を高めることを確認した。さらに籠田小の事例では、小規模校ゆえの「全員参加」「全年齢横断」が可能となり、個別の課題解決から全体の授業改善へとつながつたことが挙げられた。これは大規模校では難しいアプローチであり、学校規模に応じた戦略的重要性が浮き彫りになつた。

を育成する研究・研修体制の在り方」をテーマに、兵庫県と長崎県の小学校校長による実践発表が行われ、その後グループ討議を通じて各地域の取り組みや課題が共有された。特に、小規模校における「みんなの一歩」を合言葉とした校内研修の工夫、地域の教育研修所や中学校区単位での連携、若手教員の増加に対応した主体的な研修設計の重要性が強調された。校長の役割は「指示」ではなく「共に踏み出す姿勢」にあるという共通認識が浮き彫りになつた。左記に私が参加した第七分科会の協議内容を報告する。

○校長は「共に学ぶリーダー」としての姿勢を示すこと。

○研修は「子どもの実態」に根ざし、「何のための学びか」を明確にすること。

○地域・学校規模に応じた柔軟な研修設計を推進す

協議題②

「チーム学校」の運営意識をもたせる研

修の推進

研究テーマ

教職員の働きがい（ウェルビーイング）

を高めながら、持続可能な研究組織と

しての「チーム学校」を構築する研究・

研修の在り方

提案者 長崎県 佐世保市立日野小学校 木原健一

〔令和の日本型学校教育〕推進事業に基づき、教職員の「働きがい」を高めるための持続可能な「チーム・

学校」構築に向けた一年目の研究成果を発表。

職員の経験年数が二極化（若手とベテラン）する

中で、プロジェクトチームや研究推進委員会を通じ

た相互作用により、ICT活用や授業改善を推進。職員意識調査では「研修の有用性」「チームでの学び」に対する肯定的評価が向上。

一方で、「ICT活用による学習効果の実感」はむしろ低下しており、今後の課題としている。グループ協議では、各地の学校が「自発性」「自然発生的な取り組み」「校長の関わり方」などを共有し、共通の課題として「働きがい」と「教育の本質」の両立が強調された。その後の分科会での合意形成として

○教職員の「働きがい」は、子どもの成長実感とチームでの相互支援を通じて高められる。

○「チーム・学校」の持続可能性は、形式的な組織ではなく、若手とベテランの「自然な相互作用」にかかっている。

○教育改革の成功は、トップダウンの制度設計よりも、現場の自



発性と校長の「さじ加減」に依存する。今後の学校経営は、「人を育て、関係を紡ぐ」リーダーシップが求められる。

分科会の振り返りとして福岡県教育庁筑豊教育事務所主幹指導主事宮脇教子氏より指導助言を頂いた。その概要をまとめた。

本分科会では、校長が「学びの姿」を示すことが学校全体の変革につながるという認識が共有された。特に、教員のニーズに応じた研修設計と、学び合うコミュニケーションの形成が鍵であると強調された。協議の中で出た「経験の質的活用」に関する指摘を受けて、研修の学びを組織でどう生かすかが今後の課題として提起された。校長自身が「手応え・喜び・自信」を原動力とし、組織を動かす働きかけを強化することが求められているとして分科会全体を締めくくった。

四 大会宣言文

第七七回全国連合小学校長会研究協議会は、変化の激しい現代社会において「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成」を小学校教育の核心的使命と位置付けた。

大会では、多様な他者と協働しながら主体的・創造的に行動する「志ある人材」の育成を目指す決意を表明し、具体的な教育推進方針として、道徳教育の充実、防災教育、学校経営の自立性強化、教職員の資質向上、働き方改革などを挙げた。この宣言は、七七年にわたる小学校教育の成果を踏まえつつ、持続可能な社会の担い手を育てるための全国的な合意として採択された。

おわりに

第七七回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会は、「志」と「協働」を軸に、全国の小学校長が教育の本質と学校経営の在り方を深く学び合つ意義深い場となつた。松原修会長は「校長の笑顔が子どもと教職員を元気にする」と強調し、実行委員長の松本剛氏は「一人ぼっちを恐れず、志を共有する仲間と歩む」重要性を訴えた。

大会は無事閉幕し、次回開催地として北海道が正式に発表され、二〇二六年十月に札幌で第七八回と愛着を持ち、共に未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営」を副主題に掲げ、ICT活用による対話型分科会を目指すと表明し、次期開催への抱負を述べて会を開会した。

沖縄県より45名の参加者



五 講演

演題 「志す」

講師 聖家族贖罪聖堂彫刻家 外尾悦郎氏

講演内容として、福岡が大切にしている「世界を視野に未来を見据えて次代を担う人財の育成を目指し、

誰かのためにという志が根底にある学ぶ意欲、チャレンジ精神及び困難に立ち向かう心等の資質の育成について、外尾氏の自らの生き方を重ねた内容であった。外尾悦郎氏は、サグラダ・ファミリアで四十七年間彫刻家として活動してきた経験をもとに、「オリジン（原点）」と「故郷」の力を強調した。彼は、ガウディの思想が「分割された近代的思考」ではなく「統合された解決」にあるとし、教育現場でも多様性を認め、子ども一人ひとりの内面に寄り添う「故郷」として「コミュニティの形成が鍵である」と強調された。協議の中では、「志す」と「志す」の力が強調された。被説者の学校の役割を説いた。また、「生きた言葉」の重要性や、苦悩を通じて得られる真の学び、そして「自分自身を最大の敵として問う続ける」姿勢が、芸術・科学・教育すべてに共通する本質であると述べた。講演は教育者への深い励ました、未来を担う人材育成への確信で締めくくられた。

第七十六回 全九州中学校長研究大会熊本大会 参加報告



第七十六回 全九州中学校長研究大会熊本大会に参加して

多良間村立多良間中学校 校長 安 田 一 博



一 はじめに

大会主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の造り手を育てる中学校教育」のもと、第七十六回全九州中学校長研究大会が、令和七年八月二十日～二十二日にかけて熊本市で開催された。九州各县から総勢七百人程の参加があり、沖縄県からは、県中学校長会の有銘真一郎会長をはじめ、崎原永輝事務局長を含む二十五名による参加となつた。会場の「熊本城ホール」は熊本市内の中央に立地しており、二千三百席完備のメインホールや大小十九室の会議室、様々な催事が可能な多目的ホール・展示ホールが常設された大規模な施設で、さすが政令指定都市熊本市だと感心させられた。

二 大会の趣旨より

- 「VUCA」の時代 現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の英語の頭文字から「VUCA」時代と言われている。
- 「学習指導要領」において

社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現、「カリキュラム・マネジメント」等の確立が求められている。子供が抱える多様化複雑化した困難に対応し、子供たちの命や安全を守るためにも、教職員の力だけでなく、家庭や地域の教育力を生かしたり、関係機関との連携を図つたりしていくことが必要である。

○『令和の日本型学校教育』より

社会の変化が加速度を増し複雑で予測困難となつてきている中、子供たちの資質・能力を確実に育成するためには「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を図り、学習指導要領を着実に実施していくことが重要である。

○『第四期教育振興基本計画』より

「持続可能な社会の造り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の二つが大きなコンセプトである。

○全九州中学校校長協議会

「魅力ある学校づくり」の構築に向けた学校における働き方改革を含めた新たな教育課題に対しても果敢に挑戦し、校長相互の資質向上と目的を明確にした研究を推進することにより、学校経営の更なる充実を期待する。

三 全体会

「全日本中報告」

全日本校長会 会長 青海 正

全国中学校体育連盟の会長職も兼ねている青海会長は、沖縄県で開催した全国中学校総合体育大会の陸上競技大会を視察した翌日に、九州中学校校長研究大会への参加と多忙の中で、「部活動の地域展開」と「学習指導要領改訂」についての二つの柱で報告を頂いた。

（一）「部活動の地域展開」について

○部活動改革に関する実行会議からの内容で、部活動の「地域移行」を「地域展開」に名称変更し、将来にわたって「放課後や休日の生徒の心の居場所を確保すること、継続的にスポーツや文化芸術活動に親しむ機会を保障すること」を主たる目的とし、生徒が希望する活動を主体的に選択できる環境の整備を図ることが大切。

○今後は、学校の働き方改革の実装とともに、学校部活動の教育的意義を失うことなく、地域や学校の実情に応じた多様な選択肢を認めつつ、実施主体を学校から地域へ移行し、地域全体で関係者が連携して支えていくことが重要。

○改革の実行期間として、前期が令和八年度～十年度、中間評価後、後期を令和十一年度～十三年度

とし、現時点で着手していない地方公共団体においても、前期の間に確実に休日の地域展開等に着手するとの報告。

○次期学習指導要領においては、地域クラブ活動の普及・定着を前提とした記載としつつ、地域展開

予測困難な時代に一人一人が豊かで幸せな人生と社会の持続的な発展を実現するために、教育の果たす役割はますます大きくなっていると捉える。そのことで、校長の自覚と本大会の開催意義を確認した。

が困難な場合に実施される学校部活動に関して
も、教職員等の負担軽減の視点から一定の記載を行った方向で進められているとの報告であった。

【所感】

まずは現時点で着手していらない自治体への確実な休日の地域展開への着手とのことであるが、自治体によって異なる実態から、部活動指導員の確保や、受益者負担等が懸念される。財源が厳しい自治体への支援や、家庭の経済格差が体験格差につながらないような支援体制が必要と思われる。

(二)「学習指導要領改訂」について

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができ、民主的で持続可能な社会の造り手を「みんな」で育むことをコンセプトに、論点と方向性を説明して頂いた。

○論点 学習指導要領の構造化について

質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の改善の方向性として、「目標・内容の一層の構造化」「表形式や箇条書きでの記載」「デジタル技術の活用」が方向性として示された。

○論点 「柔軟な教育課程の促進」について

どの学校においても、多様な個性や特性を有する子供が在籍している実態が顕在化している。こうした多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題である。柔軟な教育課程の仕組みの構築に向かうことが重要。改善の具体例として、教科標準時数を下回つたことで生み出された授業時数（調整授業時数）の活用方法で、別の教科等の授業時数や、特に必要な教科の開設、裁量的な時間（補習、授業改善）の開設等が挙げられた。

○論点 情報活用能力の根本的向上

情報技術（PC、情報通信ネットワーク、AI、メディア等）の活用や適切な取扱い、特性の理解等、

デジタル社会の負の側面への対応を含めた情報活用能力向上の充実について説明して頂いた。特に「技術・家庭科」を二つの教科に分離し、技術分野で情報技術をより深く、広く学ぶ方向性を示して頂いた。

○論点 質の高い探究的な学びの実現について、情報活用能力との一体的な取組の充実を例に、方向性を示して頂いた。

○論点 豊かな学びに繋がる学習評価の在り方について「学びに向かう力、人間性等」や「見方・考え方」の再整理について具体的な方向性を説明して頂いた。

【所感】

中央教育審議会の教育課程企画特別部会の委員である全日本中学校長会の青海会長からの報告は次期学習指導要領の方向性を把握するとしても貴重な機会であった。九州大会の翌月に文科省から「論点整理」が提示され、『答申』までの経過も引き続き注視していくべきだ。

四 分科会(第五分科会)

○研究主題

「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

○協議題①

生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の在り方提案（長崎県大村市立玖島中学校 田中秀明）

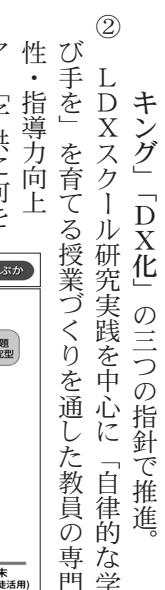
【研究の視点と研究の実際】

① 学校経営理念に基づいた学校組織全体での学び合いによる「新たな教師の学びの姿」の実現

イ 経営理念を体現するための行動指針の柱に、ア グランドデザインの作成により、全職員と法

略を共有し、教育活動を推進。

② キング」「DX化」の三つの指針で推進。
L DXスクール研究実践を中心に「自律的な学び手」を育てる授業づくりを通した教員の専門性・指導力向上



ウ 学びの流れを構造的に示した授業構想シートの開発

③ 若手教員の学級経営力向上に向けたメンター研修とチームでの学び合いの推進

イ 課題追跡レベルとDXレベルからなる、研究実践のターゲットを設定し、「共通課題自己追究型」授業に向けた授業改善。

ウ 学びの流れを構造的に示した授業構想シートの開発

イ 組織力を生かし、求められる「新たな教師の学びの姿」の報告に感心した。課題探究レベルとDXレベルからなる授業のアップデートは、まさに「令和の日本型学校教育」で求められている教師の姿だと感じた。

五 おわりに

本大会への参加は、多くの学びを得る機会であり

今後の学校経営の礎になった。特に、分科会で学校経営と求められる教職員の育成について、効果的な取り組みの紹介があり、自校に取り入れていきたい。

今後も沖縄県校長会、研究大会のますますの発展を祈念し、本研究大会の報告とします。



第七十七回全国連合小学校長会に参加して

那覇市立城東小学校 校長 神 谷 貴 子

第七十七回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会が十月十六日・十七日の二日間にわたり開催された。本県からは総勢四十七名が参加し、県中小学校長会事務局の崎原永輝先生からは「これほど多くの人数で県外大会に参加するのは初めてである」との言葉も聞かれた。教育に対する本県としての結束と学びへの強い意欲を示す大会となり、参加した一人ひとりにとって、多方面にわたり得るものの大いき研修であつた。

大会主題は、「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」志をもち多様な他者と協働しながら次代を創る人財を育む学校経営の推進である。全国から約二千名の校長が会場に参集し、メイン会場は福岡サンパレス、さらにサテライト会場として福岡国際会議場が設けられるなど、近年でも例を見ない大規模な体制での実施であった。二つの会場を行き交う参加者の姿からは、次代の教育と共に創り上げようとする熱気が伝わり、会場全体が活気に包まれていた。

■一日目午前 田村学主任視学官講話

開会式に続き、文部科学省初等中等教育局の田村学主任視学官による「当面する初等中等教育上の諸課題」と題した講話が行われた。中心と

なったのは、令和七年九月二十五日に公表された次期学習指導要領の論点整理についてであり、報道等で断片的に耳にしていた内容が、制度の背景や理念を含めて極めて具体的に示された。大変示唆に富む講話であり、私自身、今後の学校経営や授業改善の方向を再考する契機となつた。

特に印象に残つたのは、次期改訂の基盤となる三つの柱である。

一 深い学びの実装

二 多様性の包摂

三 実現可能性の確保

田村視学官は、「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものにするためには、教育課程の柔軟化が不可欠である」と強調された。具体例として示された「調整授業時数制度（仮称）」は、標準授業時数を一定範囲で調整し、学校判断で再配分できる仕組みである。また、新たな仕組みとして検討されている「裁量的な時間」は、児童個別支援、教員研修、教材研究など、学校の実情に応じ柔軟に活用できる時間として位置付けられる予定である。これ



らは、教育課程に意図的に“余白”を生み出す制度であり、学校ごとの実態に応じた学びの創造を可能にするものである。

報道で「主体的に学習に取り組む態度」が観点別評価から消えると伝えられていたが、実際に数値化を行わず、個人内評価に基づき総合所見欄などで記述式に評価する方向性であると説明があつた。評価の本質に立ち返つた改善であり、児童の成長のプロセスに寄り添う観点として大きく納得するものであつた。

また、「深い学び」の実現には、知識・技能をつなぐ力を育てる必要があるとの話があつた。だからこそ“外化（アウトプット）”が重要であり、そこに「GIGA × 深い学び」、すなわちデジタルを活用した学習の質的向上が欠かせない。ICTを単なる便利さのためではなく、思考を可視化し、対話を促し、学びをつなぐために使う視点は、まさに学校現場が今必要としている方向だと実感した。

個人的には、改訂に際し、これ以上学習内容が増えてカリキュラム・オーバーロードにならないよう、スリムでシャープな構成になることを強く望みたい。現場が実現可能性をもつて取り組める教育課程こそ、真に子どもを生かす教育につながると再認識した。

■一日目午後 分科会での学び

午後は十三の分科会に分かれ研究協議が行われた。私は第十二分科会「自立と共生の実現に向けた教育活動の推進」に参加した。

● 視点① 特別支援教育の推進

北海道猿払村立鬼志別小学校・高橋正一校長による発表は、少人数校という制約の中で、支援を必要とする児童の「多様な学びの場」をいかに確保するか、その工夫に満ちた実践であつた。校長自らが調整役となり、校内の人材活用、通級指導

教室の設置要請、関係機関との連携を丁寧に進めることで、地域全体で子どもを支える体制を築いていた。限られた条件下でも、創意工夫と粘り強い連携によって教育環境を整える姿勢に、私自身大きな刺激を受けた。

● 視点② 多様な他者と協働する資質・能力の育成

福岡県中間市立中間北小学校・青木美佳子校長の発表は、「保小中十五年間で子どもを育てる」という理念を軸にした校区連携事業「ほくほく夢ネット」の実践であつた。専門委員会を三つ立ち上げ、校種間で体験活動・交流活動を積極的に共にし、生活習慣づくりまで一貫して取り組む構造は、学びの連続性を保障する優れた取り組みである。特に、子どもたちが小中の枠を越え、地域の中で自然に関わり合う姿を描いた紹介は印象的であり、共に生きていく力を育てる教育の具体像を示していくと感じた。多様な他者と協働する力は、いま社会が最も求められる力の一つであり、本県の学校においても参考になるモデルであつた。



● 本県代表の発表

第三分科会では、本県代表として石垣市立真喜良小学校の磯部大輔校長が「離島の教育の未来へつなぐ」と題し、若手教員の職能成長を支える人事評価の工夫について発表された。離島では地区教育成の仕組みを整え、教員が互いに学び合う環境を構築していた。その姿勢に、本県の教育を支え

る強い気概と使命感を感じ、心から敬意を表したい。発表、本当にお疲れ様でした。

■一日目 外尾悦郎氏講演

二日目は、アントニ・ガウディ建築やサグラダ・ファミリアの彫刻制作に長く携わってこられた外尾悦郎氏の講演であつた。私は多くの言葉をメモに残したが、中でも心に深く刻まれたのは次の言葉である。

「ふるさとは根っこである。根っこを育てる。学校をふるさとに。ふるさとを強く持つ人は、いくらでも遠くへ行ける。」

教育の役割は、まさに子どもたちが人生を歩む「根っこ」を育てることにある。その根っこは家庭や地域、そして学校の中で丁寧に育まれるものだと、改めて気づかされた。

「六歳の子どもでも、すでに人生は始まっている。我々の何倍も観察している。」

この言葉は、子どもの感性や観察力を大人の尺度で判断してはならないという強いメッセージであり、日々の児童理解の在り方を深く見つめ直す機会となつた。

さらに、「剪定しないこと。いろいろな子がいることを喜びましょう。」との言葉は、多様な子どもへの関わりに悩む私たちへの温かく、しかし力強い励ましであつた。子どもの個性を「切りそろえる」のではなく、ありのままの姿を尊重し、その上で成長を支えることの大切さを胸に刻んだ。

■懇親会での交流

一日目の夜には、沖縄県から参加したメンバーで懇親会を行つた。ホテルのレストランで、いただいたイタリア料理はどれも大変おいしく、料理を囲みながら交わされた教育談義は、各地区の課題や学校経営の工夫など、普段はなかなか聞くことができない貴重な話ばかりであつた。地域が違え

ば教育課題も異なり、その中でどの校長も真摯に学校を支えている姿を改めて感じ、同じ志をもつり合うなど、懐かしさと温かさが入り交じる充実したひとときとなつた。

ホテルの朝食も非常に美味しい、福岡名物の辛子明太子やもつ鍋を堪能した。和室の朝食会場で誤つて他地区の校長先生の履物を履いて出てしまったひとときとなつた。ホテルの朝食も非常に美味しい、丁寧にお詫びするという少々恥ずかしい場面もあつたが、それも含めて楽しい思い出である。

■おわりに

今回の福岡大会は、教育の本質を見つめ直し、未来の学校の在り方を考える大変貴重な機会となつた。講話や分科会での学び、そして多くの先生方との交流を通して、学校経営や授業改善における新たな視点を得ることができた。本大会での学びを、今後の児童理解の深化と





『第七六回全日本中学校長研究協議会 香川大会に参加して』

糸満市立高嶺中学校 校長 比嘉正樹

一、はじめに

第七六回全日本中学校長研究協議会香川大会が、研究協議主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」とし、令和七年十月二十二日（水）から二十四日（金）までの日程でレクザムホールを主会場に開催された。全国から一八九二名の参加があり、沖縄県は各地区からの一七名が参加した。

ウ、教育支援センターの機能を強化し、NPOによる広域支援、メタバースの活用の研究を進める。

エ、多様な学びの場や居場所の確保を目指し、夜間中学や公民館・図書館等の活用や自宅等での学習を成績に反映させることを推進する。

② 「チーム学校」での支援

ア、一人一台端末を活用し、心や体調の変化の早期発見を推進する。

イ、「チーム学校」による早期発見を目指し、教師やSC、SSW、養護教諭等が専門性を發揮して連携する。

ウ、保護者が一人で悩みを抱え込まないよう支援するため、相談窓口の整備やSC、SSWによる保護者支援を充実させる。

エ、学びの多様化学校の設置を促進し、分教室型を含め全国で三千校設置を目指す。

イ、校内教育支援センターの設置を促進し、校内に落ち着いた空間で学習・生活できる環境をつくる。

二、全体協議会

(一) 第一研究協議題

「誰一人取り残されない一人一人を大切にした不登校対応、COCOROプランの効果的な実現を目指して」

不登校により学びをアクセスできない子供たちを○にすることを目指し、三つを主な取組としてまとめている。

① 学びの場の確保

ア、学びの多様化学校の設置を促進し、分教

室型を含め全国で三千校設置を目指す。

イ、校内教育支援センターの設置を促進し、

校内に落ち着いた空間で学習・生活できる環境をつくる。

③ 学校風土の見える化
ア、子供たちの特性に合った柔軟な学び

を実現するために、「授業」を改善する。
イ、いじめ等の問題行動に対する毅然とした対応を徹底する。

ウ、児童生徒が主体的に参画した校則等の見直しを推進する。

エ、快適で温かみのある学校環境を整備する。
取組を進めることでCOCOROプランの効果的な実現を図り、様々な不登校の状態に合わせた誰一人取り残されない一人一人を大切にした対応を進め、将来に希望をもてる若者の育成につなげている。

(二) 第二研究協議題

「自治的な活動を柱とした人間尊重の教育（多様な他者との協働を通して磨く相互承認の感度）」

① 人間尊重の教育

人間尊重の教育を札幌市教育の「基盤」とし、「自己承認」「他者への承認」「他者からの承認」から成り立つ承認を学ぶ力の基盤とし、子供一人一人の主体性を大切にした多様な学びの中で、協働を通して磨かれていくものとした。

② さつばろっ子自治的な活動

子供の合言葉となるさつばろっ子宣言「プラスのまほう」を策定し、「第一回さつばろっ子サミット」を開催した。中学校四校の生徒会役員からなる子ども運営委員会が全小中学校から集めた意見を基に、「みんなの笑顔があふれる楽しい学校へわたしたちにできること」というテーマを決め、企画・運営し、グループ協議に取り組んだ。

③ 札幌らしいコミュニティ・スクール
コミュニケーション・スクールを導入し、「小中一貫した教育」と連動した仕組みとし、パートナー



校において学校運営協議会を設置した。さつぽろつ子自治的な活動と運営協議会をつなげ、「子供の声」を反映させていくことで、CSを「子供と社会を繋げる仕組み」として育てていく。

三、分科会(第八分科会)

○提案発表Ⅰ

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現へ探求し続ける生徒の育成をめざして」

高知県津野町立葉山中学校長 東ゆみ
教育効果を上げるために、教職員自らの「働き方」に対する意識が変わることの必要性を説いている。

(一) 校長が学校づくりにおいてすべきこと

- ① 生徒と教職員に、教育活動のめざす方向を明確にし、自校の生徒の学びを保証すること。
- ② 教職員全員と生徒の課題を見つけ、つけたい力を明確にし、授業を柱とした教育活動の方向性を示すこと。

(二) 学校運営協議会取組

① 防災・環境の整備

学校管理の茶園の剪定・整備、グランド整備、地域清掃ボランティア

- ② 道徳教育の推進
道徳を楽しむDAY

(三) 地域と連携・協働した探究活動

課題設定に時間をかけ、様々な地域の人、町外の人と出会い、地域のフィードバックや体験学習を通して生徒自ら課題設定する。(棚田保存会と田植え体験学習、津野町役場観光推進課の方から学ぶ、津野町婦人会と郷土料理体験学習)

○提案発表Ⅱ

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現へ地域と連携した防砂教育・防災活動及び部活動改革へ

徳島県小松島南中学校長 沖建治

(二) 防災教育・防災活動

① 小松島市中学校防災会議の開催
内容：会の趣旨説明・南海トラフ地震への取組紹介・東日本大震災語り部講話・被災後三日間の様子・グループ協議・徳島大学教授からの助言・復興常備食プロジェクトへの協力

② 外部人材活用事業（市教委）活用
ア、防災講演会
イ、パントマイム講演会
ウ、「命の授業」講演会人権教育
エ、「人を傷つけない笑い」

③ 部活動推進の取組
ア、部活動改革推進会議の設置
イ、部活動指導員の採用
ウ、部活動支援員の配置

④ 部活動地域クラブ化

おわりに

今年度の香川大会へ参加して学校現場における実践発表や、参加者同士でおこなう意見交換を通じて、課題解決へのヒントを得ることができ有意義な時間となつた。更に、沖縄県内全地区から参加した校長先生方と「いちやりばちよーでえー」で知り合い、そして交流することができたことが、大きな収穫であった。

現在の複雑で多様な課題に対応するため、学校経営そのものの在り方が問われており、様々な課題にどう向き合い、どのようにマネジメントしていくか、校長のリーダーシップが求められる。今後の学校経営に資するとともに更なる充実と発展に向けて取り組んでいきたいと思う。

最後に、本大会開催にあたり御尽力いただいた全ての関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



香川大会参加者（16名）

これを機会に教育課程全体を見直し、各教育活動の重要度について全教職員で合意形成を図り、カリキュラム・マネジメントを行う必要がある。

●外部人材や部活動指導員、支援員の事業が続可能となるよう、市部活動改革 推進協議会を通じて、市へ要望等を継続していく必要がある。

- 今回の取組を持続可能にするために、防災講演会等を位置づけておく必要がある。その際、



一一〇二五年度全連小 海外教育視察で学んだこと

那覇市立金城小学校 校長 米 嵩 瞳 子

一 はじめに

コロナ禍を経て六年ぶりの実施となつた全連小海外教育事情使節団。昨年度末の募集公文を見て、公私ともにやるべきことに日々追われる中、果たして無事に参加できるのかと迷いつつも、広い世界を体感したいという知的好奇心が勝り参加を申込んだ。

全国から集まつた田中団長以下十七名の団員で訪れたニュージーランドの学校や市内視察は、得難い貴重な経験となつた。

二 日程

【一日目】七月二十六日（土）

成田空港に集合し結団式。二十時の飛行機で出発。

【二日目】七月二十七日（日）

成田からオークランドまで十一時間（時差四時間）。国内線でクリストチャーチへ。現地ガイドの方の案内で市内視察。

【三日目】七月二十八日（月）

午前、クリストチャーチ現地校を視察。午後、国際南極センター視察。

【四日目】七月二十九日（火）

早朝、空路でロトルアへ向かい、現地ガイドの方の案内で市内視察。夜は、マオリ族の伝統舞踊を鑑賞。

三 現地校視察

予算獲得や職員採用まで、校長の裁量があることに日本との大きな違いがある。素晴らしい校長先生が長く経営されている学校を訪問させていたいたいたと思う。ティータイムの雰囲気を味わわせていただいたこともあり、各学校とも教師集団にゆとりを感じた。

- (一) カークウッド・インターミディエイトスクール（クリストチャーチ）
- (二) テ・ラパ・スクール（ハミルトン）



テクノロジー教室



カームダウンコーナー

リアル室、調理実習室、工作実習室、レーザー加工室を備えたロボット室などをもち、専門の教員が配置され、他校の児童生徒も使用できるようになっている。生徒が主体的に学び、創造性を發揮できるような環境を提供している。

ニュージーランドの価値観は、マオリ族とイギリスの文化の影響を受けて形成されており、学校教育を通してアイデンティティーの形成を図っている。マオリ族の「みんなで協力し合つて生き抜く」という考え方を培い、異文化との共生を目指したカリキュラムが編成されている。新入生の歓迎時にはハンギという伝統的な食事が振る舞われ、生徒も準備を手伝う。七年生はアカロアのマラエ（マオリ族の集会場）で一泊し、歴史を学びイルカやアザラシを見る。八年生は十月にウェリントンに一週間滞在し、国会議事堂、国立博物館、警察博物館、ピースパークなどを訪れた。

- 学年（六歳以前の初等教育準備期）～八学年（五～十三歳）
- 二教室五五〇名が通う公立小中学校。スタッフは清掃員二名を含む約五〇名。地域の発展と共に、当初六教室二二八名だった児童数年の地震後の修復が完了したばかり。
- 七年生と八年生の生徒（十一歳～十三歳）約三〇〇名が在籍している中等教育機関。二〇一年の地震後の修復が完了したばかり。
- 特色ある取り組みであるテクノロジールームを主に参觀した。九つの技術専門教室（ソフトマテ



講堂、クロスカントリーのできる学校林等々の施設が充実していたり、子どもを育てる環境として身体を鍛え思考を刺激する工夫がされていた。

また、リーダーシップ教育を重視しており、カリキュラムにも位置づけられている。生徒会の児童が国際交流視察団である私たちの案内役を務めてくれた。それぞれ見学者二名と生徒二名のグループで校内を案内してもらつた。私のグループの生徒は裸足と笑顔とハキハキした態度が印象的。相手に分かれる言葉を選び、何に興味を持つているかを考え、丁寧に対応する姿勢、学校目標の掲示物、ケーラダウンスペースなどの紹介する姿に教育の成果を見ることができた。学校に誇りを持ち、今日の役割を喜んでおり、豊かな学校生活を楽しんでいることが伝わった。

授業では、それぞれの児童生徒が集中して課題

に取り組んでいる姿が見られ、先生方の指導技術の高さを感じた。教室には児童生徒の作品が壁だけでなく天井から吊るしたり、アーティスティックに配置したり、美しく立体的に飾られており、講堂にはハウスの旗が四本飾られており、

善い行いや活動の成果によってポイントが付与され、学期末には優勝トロフィーを授与される。ハウスの活動が子ども達の意欲や競争心、生きる力を高めているのは間違いない。

校長は、特別なニーズがある子どもが増加しているが支援が不足していること、国からの予算が増えないこと、教員不足など課題についても率直に話をしてくれた。長年の信頼関係で結ばれた教職員を大切にし、職場環境の改善など、スタッフのwell-beingに注力しているという言葉が心に残つた。

(II) パラマカラ・スクール（オークランダ）

一〇四年の歴史を持ち、五歳から十三歳までの一～八年生、約五〇〇名が在籍している。

樹齢百年以上のパフタカラが学校のシンボルと



(20km踏破) を振り返つて作文を書く授業をしていた。話しかけると、「思ったよりきつかつたけど仲間と一緒に越えた」とか、誇らしげに「今日も疲れが残っている」など、素直な気持ちを話してくれた。ワークシートからもこの学習のめあてを理解し、それぞれが自分の目標を持って取り組んでいることがわかつた。

四 おわりに

○国（人口・自然・歴史・産業・）は違つても、護者対応、教師の確保、評価と指導、特別な支援を必要とする児童の増加、教育予算が増えないことなど、教育課題（社会課題）は似ている。学習目標を理解することができた。

○TVでは、マオリ語のチャンネルがあり、公用語はマオリ語、英語、手話。女性の参政権が世界で最も早く認められた国であり、公共の場でのアルコール規制が厳しい。日本車が人気なのは、自分で整備して長く使う文化があるから。

○食料品が安く、ワインも乳製品も美味。話好きで、キウイを愛し、ラグビーに熱狂するNZが大好きになった。

○この団員で視察ができるとにも感謝したい。異国の地でそれが人間力を發揮して研修を深め、ハブニングも誠実に楽しむ経験をして、校長として職務に取り組むエネルギーをもらうことができた。



ほとんどが日本車（部品の調達が容易。自分で修理して長く乗るのはNZの文化である）



派遣校長としての挑戦と学び

上海日本人学校浦東校 校長 稲嶺盛久

一 学校の概要と教育方針

本校は、世界的な金融都市である上海市に設置された在外教育施設として、二〇〇六年に開校し、今年度は小学部二二四名、中学部四三六名計六六二名でスタートしました。「獨歩博愛(どつぱほくあい)」を校訓とし、「自ら学び 明るくやさしくたくましく 国際性豊かな児童生徒の育成」を教育目標に掲げています。今年度の組織目標は「小中でみがく『考動力』×考える力×動く力『未来を創る力』」であり、国際社会で活躍する力の育成に取り組んでいます。



ての自觉を育てる目的からです。

小学部では、各学年二名ずつ、計十二名で縦割り班を編成し、月に一度、一緒にお弁当を食べたり遊んだりしています。六年生が中心となつて活動内容を考え、小学部全体が笑顔に包まれる一日になります。

中学部の部活動は全員参加で、週一回・第七校時に実施しています。限られた時間ではあります
が、バスケットボール、バレー、バドミントン、トレーニング、卓球、水泳、サッカー、陸上、音楽、家庭科、美術イラスト、研究、レクリエーション、ダンスの十四部が活動しています。

また、「中学生中国語・日本語スピーチ大会」を毎年開催しており、今年で二十八回目を迎えていた。代表生徒が互いの言語を使い、三分スピーチ部門とショートスピーチ部門で発表します。中学生が自らの考え方や夢を語り合い、聞き合うことで友情を深め、将来的の「日中友好の懸け橋」として活躍することが期待されています。

二 行事を通した学びと交流の広がり

本校は、小中一貫教育の環境をもちつつ、運動会と学習発表会は小中別々に開催しています。これは、本校の規模で小中合同とすると六年生が中学生に頼りがちになるため、小学部最上級生とし



三 派遣校長としての取り組みと気づき

本校では大きな行事が小中別開催であることに加え、小学部は二学期制、中学部は三学期制を行っています。また、児童会・生徒会も別組織のため、管理職にとつては二つの学校を運営しているような感覚を覚えます。しかし、学校経営目標や方針は共通しており、同じ方向性で指導していく必要があります。

校内研究では、小中合わせて五十四名の教師が教科部会に分かれて互いの授業を参観し、研究を深めています。各教師が年間一回、研究授業を設定し、校長・教頭が参観・助言を行います。全国各地から派遣された教師が集まるため、授業構想や指導方法には違いがあります。その多样性を理解しつつ、学習指導要領を基本とし

との教育交流を行っています。小中各学年で交換校と調整し、招待と訪問に分かれて互いの文化や遊びを紹介したり歌やダンスを披露したりします。日本と中国の国際家庭が三割を占め、中国語産を訪れる機会があります。また、上海にスポーツ教室や講演で来訪した、野球・柔道・ラグビーの選手や関西吉本新喜劇の芸人の方々が本校を訪問し、交流も行っています。中学部二年生による企業見学では、十四の大手企業を訪問することができます。商工クラブや近隣企業の皆様から大きな支援をいただいております。

宿泊的行事では、万里の長城、紫禁城、天壇、

た「今の日本の教育」に関する助言が管理職に求められます。これは、在外教育施設への派遣が「研修」として位置付けられていることを強く実感する場面であります。

違いも大きく、一年次の分掌配置には制約が生じます。その中で、学年配置や授業時間数の組み方が特殊であることを学びました。

も上がり、休暇に妻や子どもたちが上海を訪れた際には、私の手料理をふるまい好評を得ています。しかし、ここは中国であり、さまざまな事情に

ます。その中で、学年配置が特殊であることを学びま

際には私の手料理をふるまい好

また、校長講話においても「研修」としての学びを感じました。小中合同や別々での講話、発達段階に応じた人権講話、現地校交流や宿泊行事での学年挨拶など、話す機会は国内の三倍はあります。

す。今年度は四月の学級・学年懇談会の時間を活用し、児童生徒を体育館に集めて特別講話を行いました。二時間目から四時間目まで、小学部低学年・高学年、中学部の三回に分けて実施し、タイトルは「しくじり校長先生」。自分自身の経験をもとに、発達段階に応じたエピソードと教訓を伝えました。

この二つに共通するのは「自分のものさして測らないこと」です。育った環境は一人一人異なります。きちんと相手と向き合い、その子に合った指導や声かけを行うことの大切さを改めて実感しました。

うで生活していきたいと考えています。

「えい、校長先生にもそんなときがあつたの!?」
と大いに盛り上がり、有意義な時間となりました。
もちろん、すべての講話が学校経営方針とつなが
るよう、軸がぶれることを心がけています。

五 上海での生活と向き合う関係



四 学校経営における課題と学び

今回の派遣では、特に二つの点が大きな学びとなりました。一つ目は校内人事です。沖縄県では僻地の中小学校を除き、基本的に小学校勤務でしたので、中学校の人事案を立てるに難しさを感じました。本校は三年勤務が基本のため、先を見越した配置が必要になります。また、日本との



五 上海での生活と向き合つ関係

成校長も書かれていましたが、上海には、虹橋校、浦東校、高等部の三つの日本人学校があり、それぞれに校長がいます。たまたま虹橋校の當間校長とは同時赴任であつたため、互いに疑問点を共有したり改善を図つたりでき、非常に心強い存在です。また、高等部校長は私の三代前の浦東校校長であり、上海日本人学校に精通しておられるため、大きな学びをいただいています。校長会の後に三人で食事をしながら語り合つた時間も貴重な学びとなりました。

こうした支えもあり、家族を沖縄に残しての単身赴任ではありますが、仕事も私生活も充実した毎日を送っています。一人暮らしのため料理の腕

上海日本人学校浦東校ホームページ

今回、このような貴重な研修の機会をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。令和九年度に沖縄へ戻りました際には、これまで培ってきた経験を生かし、少しでも沖縄県の教育に貢献できるよう尽力してまいります。本稿が皆様の学校経営の一助となれば幸いです。最後までお読み

このような上海での生活を送ることができるのは、これまでの経験が支えとなっているからだと感じています。至らない点も多く、学級經營が一人よがりになつたり、学年經營で周囲が見えてなくなつたりしたこともありました。指導主事や同僚管理職になつてからも同様で、わからないことが多いからこそ学び続ける日々でした。壁にぶつかつては悩み、乗り越えるたびにまた新たな壁がたちはだかる。その連続でしたが、先輩方や同僚に支えていただきながら歩み進めることができました。こうした経験があつたからこそ、今新たな壁に直面しても、粘り強く向き合う力につながつ



令和7年度 文部科学大臣賞受賞

○那覇市立若狭小学校

校長 照屋謙二

○南城市立佐敷中学校

校長 川上一

沖縄県小・中学校長会会報第89号

発行者 沖縄県小・中学校長会

住 所 那覇市松尾1-6-1 (沖縄県教職員共済会館八汐荘3F)

電話 098-943-9747 FAX 098-943-9748

E-mail: oki-koutyoukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)

oki-koutyoukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印 刷 株式会社 国際印刷

電話 098-857-3385 FAX 098-857-3892

E-mail: kokusai@herb.ocn.ne.jp
